



鬼レズ無双～ 00年代

onilez

巻頭言

ワタシは69年生まれなので00年代はほぼ30代と重なります。ワタシが鬼レズになってしまい、ある意味で活動のフロントにうかつにも飛び出していった時代でもあります。

活動も00年代が一番のボリュームのある時代です。大きいところから挙げていっても、個人サイト「鬼レズはマッハで走る」運営、01年東京L&Gパレード実行委員、東海WWE立ち上げ、つっちーずバー主催、GID特例法に対する質問状送付、DP法/同性婚にまつわる活動、レズビアン雑誌カーミラへの寄稿と盛りだくさんです。そのうえ、うつ病になったりしてしっちゃかめっちゃかな00年代、というか30代でした。しかし、なんという腰の座らなさ。(笑)

サイトのテキストだけでも大変な量がありますが、より抜きサザエさんよろしく、気に入っているものだけを抜き出して再録したいと思います。

カーミラの原稿については雑誌自体、まだまだ入手可能なのでアマゾンや大型書店などでご購入ください。カーミラは長年のワタシのレズビアン雑誌に対する思いを十全に吐き出させてくれる場所でもあり、「珍しく」円満に活動を終了できた場所でもあります。ご購入をお勧めいたします。(しつこい)

かなりボリュームのある巻になりますが、よろしく願いいたします。

また、寄稿してくれたbiancaさん、いつきさん、赤杉君、遅れに遅れたうえ、最初に約束していた形と違う発表形態になってごめんなさい。そして、素晴らしい文章をありがとう。「鬼総受けアンソロジー」なだけあって、素敵なテクで昇天しそうでした。

じゃあ、2巻行くよッ！（オネエっぽく）

東海ウーマンズ ウィークエンド立ち上げるの事

ワタシが名古屋に引っ越して最初にやったリブらしい仕事だ。もともと顔見知りかつリブ経験の深い3人で立ち上げたのであまり困った記憶がない。逆にむらっ気のワタシのメールの返事が滞って立ち上げスタッフのnatariを困らせたくらいだ。

ちなみにウィークエンドはレズビアン主体で宿泊施設のあるところに集まって、フェミ色濃い分科会を複数の部屋で行う、やわらかめの勉強会みたいなものだ。もともとは埼玉の嵐山の女性会館で行われていたが、90年代にバイセクシャル排除問題が表面化してバイセクシャルも包含する形で立ち上がったのがオリンピックセンターでやっているウーマンズウィークエンド（略称・WWE）。これ以降、ダイクWEとWWEが首都圏では並立して開催されることになる、東海WWEは理念として、バイセクシャルなどを排除しないことを名前にもこめている。というか、3人のうちの一人やまもとゆきがクエスチョニングだったので、そこ排除すると会。が成り立たないという。（笑）

3人ともダイクWEかWWEのオーガナイザー（持ち回りの世話役）の経験者だったので、事務作業は超サクサク進んだ。リブ慣れした有能な人が集まるとミーティングもごくごく短時間で済む。問題は地元、名古屋のお嬢ちゃんたちが来てくれるかどうかだった。小さなオシャレフライヤーも作った。しかし、置くところが限られている。あえて、ネットや東京、大阪では広報しなかった。イベント慣れした人に振り回されるのを恐れてのコトだ。

（このころ大阪でブイブイいわしてたリブ女が「大阪でも広報してあげるー」とフライヤーわしづかみにされた時には心臓が縮んだ）

んで、当日は思ったよりも盛況で、新しい試みも成功。最大の懸念だった次回のオーガナイザーもすんなり決まって肩の荷が下りた。もうワタシの手を完全に離れているけど、今も続いているみたいですよ。めでたい。

立ち上げ人：つつちー、natari、やまもとゆき

今となっては3人とも名古屋を離れているのが感慨深い。

「鬼レズはマッハで走る」というサイト

たぶん、ワタシの名前を一番人に知らしめたのはこのサイト運営だろう。今でも「鬼レズマッハの」と人に紹介されることがある。もう、10年の歳月が経っているというのに。

もともとは自分のアイデアをあまりに盗用されるのに頭にきて始めたのがきっかけだったりする。で、どんな方向性のサイトにしようかなー、と考えてゲイのオネエ言葉に対抗しうる手段というか方法論として出てきたのがこれだった。しかし、元来ワタシがエッジの効いた言い回しを好んだこともあり、鬼レズ=つつちー、になっていったのに時間はかからなかったし、面白いからワタシも二つ名として名乗るようになった。だって、二つ名が自然につくような人間ってどれだけいるだろう。「鬼レズつつちー」って、「かげろうお銀」みたいなもんですよ！ その後、ワタシのこのサイトのファンだったという女性と付き合うことになったりするのだから、やって良かったと思いますねえ。(ちなみにマメ知識ですが、「レズ」表記を使い始めたのはここでのワタシが初めてですね)

ワタシはネット上のコードなどというものには大変無知だったので、背景白に文字色初期値の黒をべた流しというトンデモナイ仕様だったことが思い出されます。それでも、熱心に読んでくださる方々がいたみたいなんです、ファンメールは全く来ず、知人が掲示板で感想以外のことを書いてくれるくらいのもので、行く先々で「読んでます！」と言われると不思議～な気分になったもんです。

あと、ここに併設されている「鬼が島」というタイトルの掲示板は定期的に荒れるという特性があり、スピンアウト企画の「ホモフォビアとともに生きる」という小冊子が生まれたこともありました。今もツイッターのハッシュタグに #onigashima というものが存在することを思うとインパクトあったんだなあと思います。

最終的にサイトの更新が停止したのは持病が悪化したのと、ログインIDなどの入ったPCが急に壊れてしまったことによって更新できなくなったためです。それでも、日記はポツポツと書いてはいたのですが、あの手のテキストサイトは流行らなくなったし、mixi楽しいからまあいいや、なノリで廃墟となって「あの時代」をさらしています。

今回、この稿を書くために古いPCから原稿を奇跡的に全てサルベージすることができましたが、ごく一部のみをここで公開するだけにしようと思います。

このサイトを核にしていろいろな人間関係が広がって行ったもんです。(悪名も)

bianca

1、ネットでのレズビアン業界と鬼レズサイト

鬼レズサイトが開始された2000年は、日本のインターネット人口が現在の1/5程度。それでも日常生活ではなかなか仲間と出会えないゲイやレズビアンがネットを使う率は、ノンケよりも高かったのではないのでしょうか。当時既に多くの出会いサイトがあり、また普段おっぴらにできない反動か、ラブラブカップルサイトも数多くありました。これらの見た目も中身も甘〜いレズビアンサイト郡の中に突如現れた無味乾燥なデザインにテキストがガッチリ詰まった『鬼レズはマッハで走る』。それは開いた瞬間、思わず覆い隠したくなる強烈なインパクトを放っていました。

導入ページからして、全くフレンドリーではないのです。『このサイトはスケアリーなレズビアンがたむろしている鬼が島です。気の弱い人、カンチガイな人はとって食われます。』動悸を高鳴らせて「入る」をクリックすると、そこには「鬼の伝説」「鬼が島」「鬼の徒然」などが列挙。既にレジェンド「鬼の伝説」。気軽には書込みにくい掲示板「鬼が島」。そして、私が毎晩隠れて通うきっかけとなったコラム「鬼の徒然」。歯に衣着せぬ物言いで業界をバッサリ切ってゆく。赤裸々な自身の暴露。鬼サイトで私は度々寝不足になったものです。

2、鬼サイトにまつわる業界噂話と評判

私の周りに実際に存在する鬼サイト読者に聞きました。

レズビアンA「私の彼女の元元・・・カノが、つつちーさんの元元・・・カノだった！繋がったってうれしくなった」

ゲイB「大学院になんとかくビアンっぽい人がいた。そこで鬼サイト知ってる？と聞いたことがきっかけでお互いゲイとビアンだってわかったわ。鬼サイトがリトマス紙」

ゲイC「ぬるーい『お仲間』的なものを一切認めず、ダメなものはダメと言って、突っ走るところが良かった。ゲイ男性のミソジニーを的確に批判した。2000年頃にはこういう濃いサイトがいくつもあったと記憶している。誰もがTwitterとかで発信できる時代じゃなかったからこそ、濃厚なサイトが花開いていたよね」

レズビアンD「オカマっぽい毒を含んだ自虐ネタを絡ませつつレズを面白おかしく書いていた。レズに会ったことがなかった私には刺激的で、半ばファンのようなノリでアニースのバックナンバーを探してつつちーさんの顔を見た覚えがある。昔は文章の面白いサイトが少なくて、しょっぱいカップルサイトが多かったから新鮮でした」

バイE「フェミ系かつ業界風のレズビアンサイトを見たのは初めてだったから安心した。当時、レズ業界にはアカデミズム臭を隠して行くものだと思っていた。“選択的レズビアン”と思われたいなかったのかもしれない」

3、何もかもがレズ的な価値観「鬼の徒然」コラム

衝撃でした。一発目から『主婦レズフォビアってナニよ！？』。そして「鬼が島」での主婦レズ大論争。これは「タブーに抵触し、地雷を踏みつけることで、コミュニティに刺激が生まれればと思う。（『ぬるいものは鬼も食わぬ』より）」という意図通りだったのではないのでしょうか。また当時、私を含め読者の多かったレズビアン小説家中山可穂批判も面白かった。ノンケにも「甘い菓子」のようなハーレクイン小説はあるし、レズビアンだからと言って血肉となるようなものを書かなくてはならないわけではないと思いながらも、やはり社会と向き合うリアルなレズビアン小説も読みたいと感化されたものです。

『「自分らしく」の甘い罠』と『何もかもがレズ的な価値観』の2つでは「レズとかバイとか、男とか女とか関係ない！ワタシはワタシらしく在ればいいんだ！」という主張に一石を投じています。「自分は自分だから」と思考を放棄しがちな自分を省みるきっかけとなりました。パレードやGID特例法など活動系の話題の他、多分一番人気があったテーマではないかと思われるのが『ズボネコですって？ああヘンタイ！』と『ネコのうまさとは』。「鬼の徒然」では、政治的テーマとこれらのテーマがうまくバランスをとっています。レズビアンのズボネコへの気味悪がり方が「オカマに対するノンケの反応」にそっくりな点の指摘など、それらは相互にリンクもしているのです。『ネコのうまさとは』は、別途ハウツー本にしても良いくらいで、「タチはみんな自分がウマイと思っている」など痛いところを突き、その理由を明確にしています。最後に、このサイトを象徴する言葉として「ワタシはまだ見ない社会にどうしようもなく飢えている（『不思議なモチベーション』より）」という言葉があり、それはこう続きます。「まだ、この世に現れない世界にどうしようもなく焦がれ、渴いています。それがどんな社会かはワタシにも見えない。ただ、今住んでいるところから『あっち』の方向にあるということだけは分かる。例えば「パレード」はあっちの方角に社会を動かしていけるだろう。」マッハで走る鬼レズをリアルタイムで見ることができた、日本レズビアン史に遺る異端サイト。これから同じサイトは2度と出てこないと思うので、その復活を願わずにはられません。

より抜き「鬼の徒然」

その5：ぬるいものは鬼も食わぬ

そもそもワタシがHPを作ろうと思い立ったのは、5年ほどもさかのぼる。当時、LABRYS

DASHっちゅーメガミニコミ（メガとミニは相反するがそうとしか形容しがたい）で書いていた「サルネット」というパソコン通信指南ページの最終回予定が「自分でHPを作る」だったわけ。途中でスタッフを辞めたので当然作らずじまい。通信環境だけは整っていたので、ソフトを買って試作はした。しかし、カノジョとのラブラブページの予定だったので、フられてしまえば構想自体がおじゃんになるのだった。アップする前で良かったわあ。ほほほ。（カップルでのラブラブページを開設して、3ヶ月かそこらで閉鎖の憂き目一つのはアリガチだわな）

んで、5年も経てば、環境は激変する。今のサイトの百花繚乱さはスバラしい。ただ、なんだか、自然とここまではOK、こっからはNGといったような暗黙の了解ができつつある気がした。「レズはx、ビアンと言いましょ（ある意味正しく、正しくない）」とか、「活動家の人は怒りそうだが、私は～だと思ふ」とか。（ちなみに「活動家」って何なのでしょうね？）一定の暖かい（生ぬるいとも言う）空気が流れているのが、居心地が良かったり、悪かったり。

「作ろう！」と決定的に思ったのはこないだのL&Gパレードの後だった。「これではいかん！（ナニがヨ？）」という脅迫的な思いにかられて実質3日でHPを作り上げてしまった。（具体的にはゲイ資本の巨大さを目の当たりにし、「ワシら、完璧にゲイに遅れをとっとるやんけ（当然）」とあせり、自分がもはやリベレーションに一身を捧げられないと苛立った）

何をすればよいのか分かりきってはいたが、かつての自分ならともかく、今の自分には不可能なプランが多すぎた（名古屋在住で仕事にフルタイム縛られている）。「仕事辞めて、東京に帰るう！」とカノジョに泣き言も言った。が、だが、しかし、現実にやれることは限られているのだった。

で、最初にHPに手を付けた。とりあえず、タブーに抵触し、地雷を踏みつけることで、コミュニティに刺激が生まれればと思う。そして、当事者を含む活発な議論（泥試合とも言う）が起こればいいなあ、と。（あら、ワタシって、何かマジメね）

「ぬるいものは鬼も食わぬ」とは、確か高村光雲の彫刻だったと思う。（2000.9.18）

その7：やっぱり「レズ」ではイヤですか？

その昔、ビアンという言葉は輝かしかった。第1回L&Gパレードでの「国際ビアン連盟」の勇姿を君は知っているか！？「レズ」なんてとんでもない、「レズビアン」では重たすぎる。「ビアン」と略すのは、フェミニズムのくびきを離れ、社会に文化を軽やかに発信していこうとするコミュニティ全体の勢いを象徴するかのようだった。

実際、「フリーネ→アニス」の流れ、笹野みちるのカムアウト、k. d. l a n g 来日と、トピックには不自由しない時期ではあった。もちろん一部には「ダイク&ビアン」は隠語でしか

ないから「レズビアン」を使った方が良いとの論調もあったが、全体には「ビアン」使用にコミュニティがナダレを打っていった観がある。（実際、私もLABRYS DASHの記事で「ビアン」を乱発していた）

しかし言葉は変質する。あれほど勢いのあったコミュニティもアニース廃刊、笹野みちるのメジャーからの撤退、相次ぐ地方サークルの休止、さらには美粋まで廃刊、などで一気に冬の時代に突入する。当然、公のメディア（これにはコミュニティ外部からアクセス可能なミニコミ等も含む）が消失したことによって、私的なメディア（インターネット、口コミ）が全盛となる。

その中で「ビアン」が「びあん」表記に取って代わってゆく。そして「びあん」は単に「レズビアン」の新しい言い換え表現ではなくて、独自の意味合いを帯びてゆく。（「びあんな私」などの形容詞使用が目立ってゆく）それはもはや「レズビアン」を指すのではなく、「女性が好きな女性（どんな風に？どれくらい？）」というあいまいなセクシャリティを指すものになった。閉鎖社会の中ではあいまいさを指摘する声もなく、本来の言い換えの意義も忘れ去られていったのが現状だ。

なぜ「レズ／レズビアン」ではいけなかったのか？「レズ」という言葉にヘテロ男性のポルノチックな欲望が塗り込められていようと、「レズ」は「レズ」であることから逃れられない。「差別されている」という現実を直視せずに、安易にびあん表記に溺れていったこと、差別語を引き受ける強さを持たなかったことが、今日のコミュニティの衰退を招く遠因になったような気がしてならない。（隠語である上は被差別者であるという意識を持たずにアイデンティファイできる）差別を意識しないで、どうして社会に関わってゆこうという気が起こるだろう。

これを読んでいるあなたは自分を何と称するのだろうか？やっぱり「レズ」ではイヤですか？

ちょっと、レズビアン以外のセクシャリティの人（バイセクシュアル、その他）には虚無な話だったわね。最近、ワタシは「びあん」という言葉が気持ち悪くてならないの。これだけの短期間にワタシの中で価値の暴落した言葉って他にはないわね。（2000.9.22）後日付記：レズ友みやきちから「びあんな」は形容詞ではなく形容動詞であるというイヤなツッコミが入った。ちなみに活用が「だろ・だっ・で・に・だ・な・なら・〇」になるそうで。以下みやきちによる例文：「アナタもびあんだらう？」「びあんだったわ。昨日までは」「びあんであることをやめたの？」「ちょっと、びあんにフラれて、嫌になっちゃって」「びあんな生活だって、いいことばかりじゃないわよ」「びあんなら、こんな私でも優しく受けとめてくれると思ったのに」「そんなムシのいいこと考えてたの？」「〇」……スバラしいわね。（爆笑）

その17：ズボネコですって？ああ Hentai！

また、女漁り掲示板の話題で恐縮ではあるんですが、なんで「タチ／ネコ」表記を欠かさない人が多いのでしょうか？「お友達募集」にも関わらず書いてるんだわ、これが。なんか不思議ではあるのですが、どうも「タチかネコかで付き合いを変える」みたいなんですね。一般ノンケ社会で友達といっても男友達と女友達で付き合い方を変えるように。

基本的に「タチ／ネコ」ってお布団の中の話だと思ってますので、単なる「お友達づきあい」でそんなことをイチイチ申告しなきゃいけないのはどうかと思います。つか、ウザい。放っとけ！ワタシがタチだろうがネコだろうが関係ないっつーの。あ、ワタシのこと「いいカンジ！」って思って、「したいんだけどお〜」とステキな下心を持ってくださる方は除く。ぜひ聞いてください！逆に言うと、下心もないのになぜ知りたがる？あんま、初対面の30分以内でエロがらみのことは言いたくないんだけどなあ（って、いつも下ネタバリバリなんですけどね）。

何もワタシは古〜いフェミニストではないから「タチネコは強制異性愛社会で形成されたジェンダーロールを模倣する恥ずべき行為で、いますぐ滅びねばならない！」（←ワタシ的訳だと、「タチネコはノンケのマネッコだからレズはレズらしく役割を振らない方がいい」）なんてことは言いません。人間得意不得意があり、ファンタジーも様々なのでタチネコやりたきゃやっています、ハイ。でも、ワタシを巻き込まんでくれ、頼む。ワタシはタチでもネコでもないから。（←キレイゴト）

しかーし、身上書のところにはっきりと「ズボネコ」って明記してありますね。聞かれてもいないのにナニ自己申告してるんだ＞自分。

これはですねえ、着てる服とシャベリの勢いで勝手に「タチ枠」に振り分けられちゃうことへの抵抗ですわね。だってさあ、ちょりっと話ただけで「お前、オンナいるのかよ？」なんてノリで来られたら、困惑せざるを得ないわけよ。カムアウトをしていないノンケが「彼氏いるのお？」って聞いてくるのと同じ居心地の悪さよ。そんで、いたたまれずにカムアウトすると、態度が急に変わるわけ。どう変わるって？「オンナノコ扱い」になるのよ（沈痛）。タチの方はビミョーにジェントルに、ネコの方は薄気味悪いものを観察する目に。そりゃもう、見事なもんですわ。……頼むから、こういうのヤメてくれんかねえ。ホントにどっちでもない人もいるんだからさあ。あと、距離を置きたがるタチの方も多いですわ。ワタシが近くにいることで、自分のタチアイデンティティが危機にさらされるらしい。まあ、酔えば酔うほどヲネエ言葉（なぜか女言葉ではない）になっていく一見タチの人物なんて「ヤバイ」んでしょうね。ワタシの言動で壊れるようなヤワイアイデンティティだったらさっさと「タチ廃業」したほうがいいのに。

よくびあんサイトで「ぎょーかい用語集」みたいなものを見ますわねえ。そこではタチネコの解説で「見た目では分からない」ってたいてい書いてある。でも、現実はずうのね。生きて歩いて呼吸しているズボネコを見たことない人がほとんどなのよ。ついでに言えば、気味悪がり方が「オカマに対するノンケの反応」にそっくりなの。タチっぽいくせにネコだなんて。ナニ言ってるのキモイ！って。これがスカダチだと、女っぽいのに実はタチだなんてカッチョイイ！ってなるんだわ。やだ！ワタシ差別されてる！！（爆笑）

みなさ〜ん、ワタシはズボネコでえす！沈黙は死、正しい情報を！私達はどこにでもいる！ズボネコ万歳！！

↑の最後の1行にどういう感想を持つか教えて欲しいわん。ワタシの考えているのと同じものを感じれば、かなりワタシと感覚が近い人だなあ、って思います。あ、そうそう。ワタシと付き合ったからって、自動的にその人たちがタチってワケじゃあナイからね。これを言っとかんとブチ

殺されるわ。(2000.10.25)

その18 : 2000/8/27(SUN.)

8月のパレードから帰ってきて、ワタシはなんともいえない虚脱感に悩んでいた。夏の終わりも寂しいが、もっと深刻な無力感にとらわれていた。

パレードに二丁目のレインボー祭り、それは新しく本当のコミュニティが誕生したことを告げる、日本のゲイの歴史上エポックメイキングな出来事だった。本当に新世紀は新しいものになるだろう。

何が素晴らしかったかと言えば、リベレーションとゲイ資本が手を結びえたことだった。それは素晴らしい。でも、ワタシの虚脱感はそこから発生していた。

あえて、きつい言葉を使うなら「ゲイがレズビアンを見切り発車した日」でもあったのだ、あの日は。ワタシはある意味油断していた。いかにゲイとレズビアンの中に顕在的な人口差があろうと、資本の差があろうと、いったんリベレーションの場に出れば人口比もビンボさも対して変わらないものになる(映画祭とかね)。ゲイ資本がリブに理解を示すのにはまだ、2, 3年の猶予があると思い込んでいた。そして、その猶予がなければレズビアンがパレードに本格参入することは難しいだろうと踏んでいた。話は4年ほど遡る。第3回の東京L & Gパレードでの騒動はレズビアンにとってゲイに対する不信感を根強いものとした。今年は「様子見」を決め込んでいる人がどれだけ多かったことか。そして、様子見で目にしたものがレインボー祭りの売り子のファンドシだった。「私たちには関係ない」そう思い込んだ人がどれだけいたことか。その日、訪れたレズバーではいつもと変わらない会話が交わされていた。仲通りの熱気を知らぬかのように。これでは、これからのゲイコミュニティの流れからレズビアンは取り残されていくだけだろう。

とりあえず、ワタシはパレード執行部を責めているわけではない。責めるくらいならオマエがやれ、っていうもんだ。小異を捨てて、とりあえず前に進むのは大事なことからだ。それにレインボー祭りは基本的にPCであるかではなく、二丁目の資本の力学で運営されたものだからだ。お金を投資して、さらに大きく回収する。お金にならないレズビアンを考慮する必要があるわけがないのだ。

ワタシが責めたいのは見切り発車されたことにも気付かないレズビアンの不甲斐なさだ。第3回のときのエネルギーはドコへ行ったのだ?そして、どうして新しいものを作り出せなかったのだ?もう少し、危機感をもってもいいのでは?

「ゲイと関係なく、私達は独自路線で行く」そういう主張もわかる。でも、一番効率のいいやり方はゲイのPCさを刺激して、大きなムーヴメントにぶら下がって運動することだ。プライドない?でも、ワタシはそういう節の屈し方ならいくらでもするし、泥もかぶる。

今、ワタシの夢は名古屋で金をかき集めて、全額をパレードや映画祭の寄付に叩き込むことだ。そして、お金の力でゲイコミュニティをもう一度、振り向かせたい。

今だワタシの虚脱感は癒されていないのだから。

ああ、ついに本当の意味での地雷を踏んでしまった気がするわ。逆に言うと、主婦レズのイチヤモンなんて、本質的には怖くもなんともないってことです。この文章でリベレーション系の目に文字のある人々がどんな反応をすることか。怖あああい！（2000.11.2）

その19：ネコのうまさとは

カタイ話の後はミンナの好きな「タチネコ話」よお～。鬼が島の反応の良さを見るにつけ、「これって、レズのツボだわ！」という思いを強くしたわ。

さて、七不思議の1つに「タチはみんな自分がウマイと思っている」があります。えー、これは大きな間違いです。おおむね「バリタチは下手」です。反論もあるかと思いますが、身をもって経験してるので却下です。リバ子の方がはるかにウマイです（当然）。

さて、ネコにもウマイヘタが存在します。今、「え？」と思った人は猛省しましょう。多分、アナタ、ネコに「へたくそ」って馬鹿にされてます。ネコのうまさは「自分がイケる」「相手が満足する」の2点に分類されます。前者は少しづつポイントをずらしたり、セクシーに「XXして」と伝えたり、気合でイったり（！）言わずもがなですが、後者は高度なコミュニケーションスキルが必要です。

タチの方々は触らせてくれないことが多いので、「気持ちよさ」を感じていただくには脳みその中を愛撫するしかないわけですわ。だから、セクシャルファンタジーがどれだけ満たされるかが大切。相手のセクシャルファンタジーを正確に判断し、アウトプットしていく。あえぎ声1つをとっても、「絶叫系」「恥ずかしそうにあえぐ」「できるだけ無言でうめく」など、タチ様が何を欲しているのか見抜き、かつ自分のテンションが落ちないように相手好みの声を出す。これにキスの仕方やら腰の振り方やら、も一膨大な作業をこなさねばなりませんわ。エッチのプロデュース作業と言っても過言ではないでしょう。

ですから、ネコの子がイー感じでイッたからといって「オレってウマイだろ？」なんて鼻の穴を膨らましちゃいけまへんよ。やさしいネコちゃんなら黙っててくれますが、ワタシみたいな化けネコに引っかかると「42点」なんてミも蓋もない採点が飛びますから。

無理矢理、中和作業にかかっていますわね。でも本当は「混ぜるな、危険」かもしんないけどさあ。（2000.11.2）

その41：「自分らしく」の甘い罠

変態サイト（ココ含む）を渡り歩いてよく目にするのが「レズとかバイとか、男とか女とか関係ない！ワタシはワタシらしく在ればいいんだ！」という主張。うなずきかけて、「なんか違う」と傾きかけた首を戻すということが何度もある。

自分にひきつけて考えれば、ワタシは「自分らしくありさえすればいい」という境地には全

く至っておりません。カテゴライズはありとあらゆるメンドウな問題（グラデーションの分断、同一カテゴリー内での差異の消滅、うさんくさい連帯感など）を引き連れてはきますが、ラベリングから発生するプライド、そこから巻き起こる運動、それも大事だと思うのでっす。今だワタシはレヅとして生活し、レヅとして生活できず、レヅとして活動し、ゆえに挫折しつつけているのです。自分らしくあろうとしても、入社する時は、髪の色が明るすぎやしないか、短すぎやしないか、服がカジュアルすぎないか、そんなくだらないことに縛られています。

確かに、「自分は自分よ！」と、言えるのはカッコイイ。まろうさんなんかがそういうカンジで生きていってるのはすんげー憧れる。いつかワタシもかくありたい。

ただ、サイトに溢れる「自分らしく」の中の「自分」がどの程度、充実したものかは疑問が多い。人間誰しも確固として揺るぎのない自分らしさの種、は持っているけれども、芽生えさせるのにはそれなりの経験や思考が必要だと思うから。

飲み屋で「自分は自分だから」と思考を放棄して、口半開きで女のケツを追いかけているレヅには説教のひとつもしたくなる（ホントはしません）鬼レヅではあります。

ホントは深い問題だけど、今回はさらっとね。長いこと徒然書いてなかったから、ネタがたまっていますのよ。（2001.8.13）

その42：新世紀のパレード

終わりました。今年のパレ。それと共にワタシの夏も終わったわ。考えてみれば、海や花火大会に行ったりの夏らしい遊びは何もしなかったわ。そして、空は秋の色。

まだ、今年のパレードを語れと言っても、確固とした意見や感想はまだ出てこない。いろんなものがゆれ動き、熱く煮えている。きっと、ゆっくりゆっくり溶岩が岩になるように冷えてゆき、胸の中に結晶を残すだろう。時を見て、その結晶について書きたいと思う。ワタシの中ではいまだパレードは終わっていない（具体的な残務整理もあるし）。

まあ、おおむねパレードは大きな問題もなく運営されたと思う。細かい「ぎゃー！」な反省は山のようにあるが、来年に引継ぎ、手渡してゆけるものだと思っている。

個人的に、一番の反省は実行委員の業務とは関わりないことだが、CAFE Willowのブース出展で大赤字を掘ったことでしょうか？ガイドブックの広告コミで出展料8万円（これはHPで公開もされてるからいいわよね？）。それでWillow分の売上が約6万円。しかし、委託販売がほとんどだったので、純利益と諸経費がトントンで、8万円がマルマル赤字になってしまった。ざくっとした計算で、きちんと計上していないのではあるが。（見るとユーウツになるので、きちんと残務処理をしていない。委託された方々ゴメンナサイ）

本当は自前で販売するものがあったり、全体をオーガナイズできればよかったのだが、実行委員の業務もあるので物理的に無理。信用できる人に業務を委託するのも距離的な問題で無理。とはいえ、レヅブースがここしかなかったこともあり、意義は大きかったと自分を慰めている。

これからWillowの売上でせっせと埋めていくしかないのだが、「イタイのう」ってカンジで

ある。(2001.9.5)

2001年 東京レズビアン&ゲイパレード実行委員、つー重荷

今まで、「業界の下女」、「業界スキマ家具」を自称はしていたが、「いわゆるマジメ」なメインストリームの活動の役に就くというのは初めてだった。それはそれなりの必要性をワタシが感じたからであって、この時の焦りのようなじりじりした感覚は今でも生々しい。（「マッハで走る」の項 参照）

着任して初めて「遊び」ではなく「活動」においてゲイ男性と四つに組むことになったのだが、その話の通じなさに呆然とした。まず、最初にゲイ男性主体で枠組みを作られてしまっているのは、それがその人々の中では「平等で効率的」だったとしても、後から参入してきた「異種」にとっては「平等」ではなかった。

当時、レズビアンカルチャーで商業的な活動をしているのはイベントが2つに数件のバーしかなかった。そのようなところにブース出展をお願いするのはどう考えても不可能だった。しかし、女性向けのブースがなければ女性参加者は疎外感を感じずにはいられないだろう。00年のワタシのように。

何度も女性向けブースの必要性とブース出展の減額措置を訴えたが、他のスポンサーに対する平等性に反するということで却下された。

（この時に故・春日亮二氏とメーリングリスト上でかなり激しくやり合ったのを覚えている。彼は日本のゲイマーケットの申し子だったのもあって、ワタシの意見は受け容れづらかったろう。ただ、やり合った中で何だか友情みたいなものが醸成されたのは今も忘れられない。数年後に訃報を聞いて、駆け付けられないことに涙をこぼした）

結局、苦肉の策としてワタシ個人がブースの権利を全額買い上げ、LOUDにその運営を委託する形を取ることにした。8万円。割とまじめに働いていたワタシにとっても小さな額ではなかった。しかし、当時はこのような形でしか、結果の平等（らしきもの）を得ることはできなかった。今もこのことを考えると自分の力の至らなさを想う。というよりも、後任者たちの苦労を想うと慙愧の念に堪えない。何か問題が発生した時にシス女性が「金出せばいいんだろ!」とってしまう下地をワタシが作ってしまったのだ。

ただ、春から夏にかけて、名古屋という遠隔地からほぼ週末ごとに新幹線に乗ってミーティングに現れるワタシという人間は一部のゲイ男性に取ってだが、ある程度の信頼を勝ち得るようになったようだった。そして、それは今もある程度生きてはいるらしい。

それでも、このパレードの成り立ちがシスゲイ男性だけの集まりで企画されたことにたいして誰も問題にすらしなく、疑問すら感じないことにワタシは深い不満を覚えるのだ。

だったら、お前がやれば?という問いは何度も繰り返されたし、ゲイの資本に寄生しているということも何度も言われた。でも、ワタシにあれ以上、何ができたのか?それに誰か答えて欲しい。

あの、今でもワタシの心を虚無感で満たしてしまう「レズのくせに事件」（90年代編 参照）の後、あのパレードの主催団体や個人からは何も謝罪らしきことは聞かれなかった。謝罪を引き出そうとする試み、団体同士の和解の仲立ちをしようとする試みすらもなかった。ミソジニーは96年夏から今に至るまで温存されたままであり、2000年に新しい団体でパレードが立ち上がった時に完全外部化した、ミソジニーは旧体制のパレード団体に封印される形で。

ワタシが退任した後もシス女性が実行委員としていつかないこと、さまざまな問題が新団体にはあった。

ワタシはおもねってしまった。当時のゲイのメインストリーム文化に。しかし、実際にあの場では「聞かれる」言葉を話さないとうにもならなかった。「正しい」と思えることを言って、実行しようとするには、まずはそれをクリアしなければいけなかった。

本当に、あの時ワタシはどうしたら良かったのだろうか。

答えはまだない。

この項だけ大項目なのに、この原稿に呼応する寄稿者がいない。ワタシが東京L & Gパレード（現東京プライドパレード）に落とした残響がどのような形でシス女性委員に響いているのか、あまりに遠く、聞くことができなかったのだ。それだけ、シス女性委員の入れ替わりが激しかったということだ。

ワタシがトランス業界にずっぴりと片足を突っ込むきっかけになったのは名古屋にあって、通い詰めていた「AQUA POWDER」というレズバーの隣のビルに「T's BAR」という店があったからだ。その店は名前通り、T系ならば週末の趣味女装もガチの性同一障害の人も受け容れる、ちょっと毛色の違うバーだった。と、いうか、そんな店でなければワタシが常連化することはなかったのだが。

このお店の常連さんのひとりが東京新聞の田原牧記者。仲良くなって、ふたりで随分と夜の街に似つかわしくない話をカウンターで繰り広げていた気がする。

このころ、ゲイカルチャーについてはだいたい網羅し終わっていたので、「次はトランスだー!」とばかりにかなり栄えていたMTF系のサイトを回りまくった。ホルモン使用が一般的になる前だったので、正直目に優しくない画像もたくさん見た。それでも「異界」の住人であるワタシをずいぶんとやさしく受け容れてくれたと思う。その理由としては基本的には純女に対する憧れが抜きがたくあること、ワタシの容姿がボーイッシュなのでみた目を張り合わなくて済むこと、MTFのかかなりの割合が性指向が女性に向いているコトによるレズビアンへの強い憧れ。こういう手札が揃ったのでワタシにとって居心地のいい店になったのは無理もない。

んで、店主の菊ちゃんが「なんか面白そうなことはやってみる」人だったので「つっちーずバー」というイベントをひりだしてみるコトになった。入場料1000円の1ドリンク付き、いったん入れればワタシが作りつづける料理は食べ放題つーシステムで。つっちーずバーは24時閉店で以降はT's

BARの通常営業になるので長居したい人のドリンク代はお店の取り分に。ワタシはコスト安のパーティー料理を作るのが得意だったので、ギリギリ黒字になった。ワタシのリブ活動で黒が出るのは実にまれなこと。それもあって入院までのけっこうな期間月2回の日曜日にクルマに食材や大皿を満載して女子大小路に向かったのです。

土肥いつき

わたしがトランスジェンダー業界にデビューしたのは、おそらくは1999年3月、玖伊屋への参加あたりだったかと思います。その後、2001年4月に県立岡山病院（現、岡山県精神科医療センター）を受診したことをきっかけに、G I D業界にも顔出しをはじめました。とは言え、はじめての顔出しはそれから約1年後、2002年3月に岡山で開催されたG I D研究会（現、G I D学会）でした。当日、研究会に参加したものの、知っている人はほとんどいません。「寂しいなあ」と思いながら、それでも懇親会に参加し、その後、G Q B U Sが主催する「トランスジェンダーの自助支援グループ全国交流会」に参加しました。会場に入って行くと、真ん中のソファが置いてあるあたりで大騒ぎをしている一群がありました。「ふ～ん、針間さんか」「あのおっさんは大島さんやな」「あれは野宮さんか」「あっちで騒いでいる人は東さんね」。その中で、えらい元気な人がいる。それがつっちーでした。なにやらおもしろそうな気がして、たまたまあいていた席があったので、その隅っこに座らせてもらいました。とはいえ、その時はそれだけのことでした。その後、いつの頃からか、「業界下女日記」を読むようになり、わたしもmuchanで日記を書くようになり、気がつくコメントをしたり返したりという関係になりました。おそらく、つっちーは名古屋で「つっちーずバー」をやり、わたしは京都で「玖伊屋」をやりということで、共通の感覚があったのかもしれませんが、ただ、そのもっと奥深くになにかがあるのかもとは思っていました。それが表面化したのは、やはり「特例法」へのスタンスだったのかなと思います。今回この文章を書くため、「鬼レスはマッハで走る」を読み返しました。その中にあった一文「こないだのTFNのフォーラムが5秒間の黙祷で始まった衝撃は一生忘れないだろう」を見た瞬間、「あの頃」のことが鮮明に浮かびあがってきました。そういえば、運命の日、2003年7月10日付のわたしの日記「成立したんだろうな」に、つっちーは「当事者間のしこりもさることながら、一般の非当事者による法の牽強付会な運用がスゲーこわいです。

（つ）」とコメントをしてくれました。トランス非当事者であるつっちーが、もしかしたら「夜道で刺される」ことも覚悟で、思ったことを率直に語ってくれたのは、きっとトランスの人々と顔がわかる形での「つきあい」があったからなんだろうなと思うし、それがわたしたちへの「愛」なんだろうなと思います。あれから8年。つっちーの予言は現実のものとなってしまった気がします。そんな流れに抗するためにできることは、顔のわかる形でのつきあいをベースにしながらも、やっぱり「思ったことを口に出さずにいられない、タダの悪ガキ」であり続けることなのでしょうね。いまもtwitter上で「特例法」について書いているつっちーを見ると、「よっしゃあ！」と、元気をもらえます。でも、個人的にヒットだったのは、「レスはタダでできる」発言だったんですけどね（笑）。

青天の霹靂とはあのことだった。以下の条件をクリアしたものに限って戸籍変更が認められるという話が自民党中心に突き付けられたのだ。1. 性同一性障害の診断を受けていること 2. 婚姻していないこと 3. 外性器が望みの性に近似し、生殖能力を失っていること 4. 子供を持たないこと

ワタシはいつきさんの寄稿文にあるように00年代の初期からGID学界にも出入りしてトランスピープルの一定の考え方にもある程度知識を持っていた。シンパシーを感じる部分もあれば、クソいノンケに同化したいあまりにレズとかの「ド変態」に嫌悪を露わにする人も多くいた。今、GIDの代表格になっている人が初対面の時に嫌悪を露わにしたことは今もってその対応が記憶に焼きついているし、一生忘れない。

とまれ、「戸籍変更」をトランスピープルが皆望んでいたわけではなかった。現在の同性愛者の中にある「同性婚」をめぐる意見の相違がある程度には一枚板ではなかった。

しかし、LGBはあまりにトランスコミュニティに無知だった。ある程度名前の知られている人が特例法推進に積極的に動いたために、それがコミュニティの総意だと勘違いする人があまりに多かった。この時、ワタシはLGBTの連帯というのは嘘っぱちだと確信した。連帯を謳っているのに相手を知らずに連帯ができるわけがない。それはただの野合でしかないとワタシは思った。

ただ、ワタシの中で最も怒りを燃やしたのは「クィアセオリー」に乗っているかのように振る舞っていたトランスの活動家が手のひらを返したかのように従来の家族制度に土下座したことだった。バイセクシャルのはずの人が急にノンケになった。MTFレズビアンの方はひた隠しにしてロビイングした。「性同一性障害は同性愛などとは違います」の文言には、怒りのあまりに股がへソまで裂けるかと思った。1週間くらいはマトモに眠れなかった。

さらにワタシの怒りに火を注いだのはワタシの人格に対する誹謗中傷（貧乏な田舎のレズがどうこう）とか、昼夜を問わない携帯電話への非通知着信、スパムメール、ウイルスメールのつるべ打ちだった。要は「特例法を通すのに邪魔をするものの口は徹底的にふさぐ」やり口だった。

同じようなことは子供のいる当事者にも行われた。表ざたにはなっていないが子供を持つ当事者を「とにかく話をしましょう」と呼び出して、事務所に連れ込んで半軟禁状態において「反対しない」と言質を取ることで行われた。（これはに関わった人はマジ地獄に落ちるとワタシは確信している）

子どもがいないことが要件になっている以上、現実的には子供を殺すかしかない。不可能である。この青天の霹靂から実際に法が可決されるまでの間に前途を悲観して3名亡くなったと聞き及んでいる。いつきさんの寄稿文で

「TFN（トランス・ファミリー・ネット）のフォーラムが5秒間の黙祷で始まった」のはそのためである。（軟禁事件も自殺者のことも直接田原記者に聞いたことなので単なる風聞ではない）

それだけ問題点が山盛りであった特例法であるが、LGBの反応は実に薄かった。「良かったじゃないーい！」という反応が大半で、同性間の婚姻が「初めて文書として否定される」ことについて危機感を持つ人はわずかだった。

そのため、公開質問状を各所に送付したが、「足を引っ張っている」という反応ばかりだった。この時に名前を連ねた人たちには本当に感謝している。当時、これは本当に勇気のいることだった。戸籍制度の強化や、同性愛嫌悪の内在など、問題点を分かっているながら、何もしなかった活動家はあまりに多かった。

当時、あまりに急なことだったのと病み上がりでもあったため、論旨が分かりづらく誤解を招いた部分が多かったと思う。それでも当事者内の論議を経ない拙速なロビイング、内在する同性愛嫌悪、後に条件付きで緩和される「子なし要件」の問題性、問題点はいくらでもあった。

また、ワタシはフランス法のPACS（市民連帯協約）的なものを推進したい考えであったので、「戸籍制度や同性婚は関係ないのではないか」と言われた。しかし、戸籍制度が強化される中でPACSのようなものが実現しやすくなるのか、むしろ反対であるし、同性婚の否定は簡単に同性愛嫌悪に結びつく。

この事件はワタシの中で「連帯」と「野合」の違いについて、LGBの自分たち以外のマイノリティにあまりに興味を薄いことについて深く考え込ませるに至った。

この特例法の通過前に当事者グループが割れて、自民支持派と公社共支持派でアレコレあったことについては当事者の総括を待ちたい。

とにかく、ワタシがひどい目に会ったのは確かであった。

暗いトンネルとヘドロ風呂

まず、朝早く目が覚めた。夏の朝、まだ暗い頃に。何も考えずにもう一度寝た。それが始まりだった。それは何度も繰り返されたが「早起きできてラッキー」としか思わなかった。

秋から咳が出始めた。痰のからまない乾いた咳が出た。深夜、突然こみ上げる苦しさを吐き出すように咳をした。一度出だすとなかなか止まらなかった。昼には発作のような激しい咳はなかったが、いつものどに引っかかりがあった。そして、欠勤が増えていった。

なにが辛いのかも分からず、ただただ辛く、起き上がることができなかった。人に言われるまで気づかなかったがしぼむようにやせていた。そして、口の悪い同僚に「急におばちゃんになった」と言われた。確かに鏡を見ると、10歳以上も老けているように見えた。同じ服、同じ髪型、同じ化粧。何より、同じ人間であるはずなのに。

冬の入り口、ノートPCでワード文書を目の前にしている時、突然文章が読めなくなった。字は読める。しかし、数ヶ月前に自分が作成した文書の文意が全く取れなくなっていた。文頭から舐めるように字を拾って読んでいった。そのたった数枚のレポートを読み終わったとき、何が書いてあったのか理解できなくなっていた。たった数枚のレポート。数ヶ月前にテンプレを使ってももの数十分で作成したレポート。作成時間以上の時間をかけても理解できない。

研究者にとって、レポートが分からなくなるというのは致命的だった。

そのまま、目の前のPCでメンタルクリニックの連絡先を検索し、会社の地下の駐車場から携帯で予約を取った。

限界だった。デスクに戻っても、何もできず、目の前の小汚い床にスーツのまま寝転がりたいたいという誘惑が襲うばかりだった。

数日後、訪れたクリニックではあっさり「うつ病」の診断が出た。即時、入院が勧められた。確かに、この頃にはすでに停まっている車すら自分に向ってくるような強迫感とビジネススーツの集団を見ると息苦しくなるまでになっていたから。それでも、事態を甘く見ていてワタシは「リタリン」という薬を服用した。効いているうちは次々舞い込むクレームも「ハイ、喜んでー！」と処理できた。でも、薬効が切れるとデスク横の床に転がりたくなるのは相変わらずだった。薬の効いている時間はみるみる短くなった。ウルトラマンのカラータイマーじゃねーんだから。薬が切れ、夜遅く誰もいないオフィスでホントにスーツのままデスク横の床に転がって、「もうダメだな」と思った。現況の仕事にはどうしても耐えきれなかった。クリスマスを前にして、ワタシは診断書を振りかざし、10日あまりの長期休暇に強硬に入ることにした。この時には度重なる欠勤で有給休暇はほとんど残ってはいなかった。それでも休みさえすれば何とかかなると思っていた。

名古屋でワタシは一人きりだった。うすら甘い「エンシュアリキッド」を飲んで年を越した。湿気た布団で一日暮らした。洗濯も掃除も炊事も何もできなかった。自分の頭の中だけではなく、生活そのものが崩壊していた。数日に1回、思い出したようにペットボトルの飲料と菓子パンを買

いに出た。冬の空は青く、まぶしく、いい日だった。

「死ぬにはいい日だ」

アパートの近くの幹線道路の信号の前で大きな車を待った。ほんの、2、3歩。それだけ歩けばすべてが終わるのだ。このどうしようもない、ワタシという存在が。

なのに、ショボイ車しか来ないのだ。全身打撲で済んでしまいそうな軽バンやファミリーカー。ワタシが飛び込むべき10tクラスのトラックなんて来やしなかった。そして、目の前の歩行者用信号は青に変わった。車は停まった。

冬だった。とても寒い日だったのに、髪の毛の中からずぶ濡れになったように汗をかいていた。死にかけた死にかけた死にかけた。

ワタシはホントはあそこで死んでいたのかもしれない。歩きながら生きていることを信じられなかった。ただ、良く分かったことがあった。「入院しないと死んじゃうんだ」、と。

冬休み明け、ワタシは問答無用で入院した。まともに歩けず、友人の手を借りて捕獲された宇宙人ようになって精神科の閉鎖病棟に入院した。親は泣いたらしい。知るか。ワタシはこの期に及んでまだまだ生きていたかった。死にたくなかった。実に生き汚い人間だった。

1月上旬から4月上旬にわたる3ヶ月の入院生活もいろんな人がいて面白かった。

主にワタシが壊れたのはその仕事のエグさからだった。退院してそのエグい会社と直接交渉する気力はなかったので人権系の弁護士を立てて任せきりにした。この件にけりがつくまで8月までかかったが、この弁護士さんはいい仕事をしてくれたと思う。感謝である。

そして、名古屋にいる理由もなくなった。車で現場に行くこともない。家財の大部分を処分して懐かしい東京に戻ることにした。「お仲間」の多い中央線沿線、東中野。ここに住んだ2年間は楽しいモラトリアムとしてワタシの記憶に残っている。

いまもお世話になっている投薬治療のうまい先生にも巡り合った。

長い長〜いトンネルの出口は東中野にあったというわけである。

そして、うつ病の不快感の実感としてどう感じるのかを書いておきたい。ただ、湿気た不潔な布団にくるまれながら、昨日も明日も希望なく、ただただぬるい不快感にゆるゆると煮られているだけである。「ぎょへー！」とか奇声を上げて表に走りだしたりはしない。そんな元気があれば、どれだけ良いことか。ぬるく、不潔な、不快。が、ただただ先が見えずに延々と続いている。その先の見えないトンネルは多くの患者の「治癒したい」という希望を折る。出口が見えるまで、そのトンネルはただただ暗く、果てなく、不快なものだ。

どれだけ多くの人がトンネルの中で命を絶つだろう。本当は死にたくななどないのに。

あの暗く、長いトンネルを想うと頭の中でさっと幕のようなものが降りる。きっと、思い出すこと自体を本能だか何かのようなもので拒否するのだろう。今はワタシは元気だ。朝、どうしても起きられずに自分を責めて泣くこともない。若干の後遺症で集中力は落ちたが小説を楽しむこと

もできる。事故による死亡事故のニュースを見て「あれがワタシだったら」と羨望のため息をつくこともない。朝起きて、一日働いて眠ることができる。

ただ、人と会いすぎたり頭を使いすぎて疲労した時、軽く手が震えるような感覚と「あの」トンネルのそばに立っている恐れとで急に血圧が下がるような気がする。

でも、ただそれだけだ。

ワタシは生きている。

(とかいいつつ、現在、本格的に再燃してトマトの世話も十全にできない状態よ。この病気は本当にしつこいし、命を取りに来るからマジ危ない)

DP法/同性婚を考えたワタシの経緯（前）

ワタシは考えた。「レズとか割にゆるくまとまってイングリッシュ打ち出せるものはなんだろうか」やっぱ、「夢の同性婚じゃね！（失笑）」。当時、ワタシにはお付き合いしている女性はいなかった。自分の現世利益よりも停滞気味のレズビアンコミュニティのテコ入れに使おうという気持ちが強かった。それに、長期で見れば避けられないトピックであるし、ワタシと同年代のレズがお陰を被ろうとすれば、現時点（02年）で活動開始しないと生きているうちにいい目に遭えそうもない。

まずは海外のDP法/同性婚事情を調べることから手をつけた。つか、この時にはパートナー法と同性婚の違いも良く分かっていなかった。海外から聞こえてくる曖昧模糊としたニュースをもっとよく知ろうと躍起になったが良く分からなかった。今思えば、日本人記者も良く分かっていなかったのだろう。日本語の文献はほぼなかった。なんとか、インターネットで色々な英語文献を拾い集めて気合いを入れて読み込んだ。エロチカを読むときと同じぐらい気合いを入れて読んだ。（滅びろ）そして、同性婚とパートナー法の違いがやっとわかった。この時、ワタシは大きな間違いを犯しているのに気付かなかった。こと、同性婚やパートナー法についてはヨーロッパの方が先進的であるにもかかわらず、英語しか読めないためにアメリカ的なDP法がまず念頭に置かれてしまったからだ。なので、フランスのPACS法（市民連帯協約）はさっぱり分からなかった。第二外国語でフランス語は取っていたが、マトモに読解できるレベルではなかった。あれこれ、二次情報をつなぎ合わせてから、「これがワタシの求めている形に近いんじゃないか？」と震えた。（果敢にDP法など導入している国の大使館にメールを送って、何か資料等ないかと問い合わせ総無視食らったのも今はいい思い出・笑）

これと並行して「DP法／同性婚の可能性を考える女性の会」を立ち上げた。会の規約では現実的に同性間の法的保障を目指すコトが目標になっているにも関わらず、会の集まった人の思いは雑多だった。勉強会のつもりの人、「今」を何とかしたい人、何かわからないけど集まりたい人。しばらくはワタシが勉強した内容のダウンロードとその二次会がメインだった。

そのうち、ワタシは鬱に倒れる。のに、最初の診察を受けたその足で新幹線に乗り、栄養剤のエンシュアリキッドを飲み、ウーマンズ・ウィークエンドで分科会を持った。レジメが足りなくなるほどの大入り満員だったが、朦朧としていたため何を話したか覚えていない。ただ、その何回もレジメをコピーに走る姿を見て。「ああ、やっぱり求められているんだ」という思いを強くした。

だが療養生活を送るうちに先に述べたGID特例法という青天の霹靂が落ちる。これは同性間の法的補償を求めていく上で「明らかなハードル上げ」になる。しかし、会の雑多なメンバーではどう対応するか意見はまとまらなかった。ただ、個人として動いたらと「個人」からアドバイスされた。そして、質問状は公開された。風向きは連名をしたワタシたちに不利だった。そして、個

人の勝手な行動としてワタシははしごを下ろされる。

■会の代表が退任・退会したことをご報告します（2003年8月23日）

発足時から会の代表であった土屋倅から、代表の退任および退会の申し出がありました。当会は本人の希望を受け、8月2日にこれを承認しました。ここに至った経緯をご説明いたします。

先の国会で「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が成立しました。土屋前代表は、法案が公にされた当初からこれを「『同性婚』を否定する法律である」とみなし、自らの個人ウェブサイトで成立反対を表明してきました。しかしながら、他のメンバーはそのように考えることはできませんでした。

他のメンバーの見解は次の通りです。この法律は「『同性婚』否定」を明確に記すものではない。現在日本で「同性婚」を否定しているのは既存の制度であって、当の法律のなかに「同性婚」に関連する新たな障壁が設けられたわけではない。また、性同一性障害に関する法律のなかで、「同性婚」の可能性を新たに拓くことを求めるのは無理がある。

このような見解の相違から生じた溝を埋めるため、これまで何度も話し合いをこころみてきました。しかし、6月19日をさかいに土屋前代表から話し合いを継続する意志が示されなくなり、最終的に「代表を退任し、退会したい」旨だけが伝えられてきました。会としては、代表の事実上の不在によるこれ以上の活動の停滞を避けるため、これを承認せざるを得ませんでした。

当会はこれからも、今のメンバーで「DP制度／同性婚」の可能性を探る活動を続けてまいります。今回の一件に関しましては、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。（メンバー一同）

上記のようなお知らせがサイト上に骸をさらしております「話し合い」をするということはワタシが一人で名古屋から東京に出向くことであるし、まあ、早い話が問題を認識している会員もいるのにさらし首にされました。この後、会が少しでも動いていたらさらされた甲斐もあったものですが。10年近くさらし首にされたままであります。ネットの残骸は怖い怖い。

もうこの頃には相当凶太くなっていたので、寝込んだりはしませんでした。（すでにうつ病で寝込んでるし）

これがダメなら別の手と、ワタシは活動を継続していくのであります。

（続く）

*2001～2004年の短い期間、ワタシは「土屋倅」という活動名を使っていた。本名ぎりぎりの腹の据わっていない名前でありました。

当初、私のパートナー（石坂わたる）を介して知人という関係だった土屋さんと連絡を取り合うようになったのは、2003年春です。当時、立法化が急スピードで進んでいたGID特例法案。そのいわゆる「子なし要件」「非婚要件」を土屋さんが批判していたとき、私が土屋さんのサイト「鬼レスはマッハで走る」掲示板に書き込みをし、メールを送ったことが本格的なファーストコンタクトだったように記憶しています。

その後土屋さんと私は、有志を募ってGID特例法の立法化を推進する団体に公開質問状を送付。その際、我々に寄せられた「GID特例法の動きを批判するのではなくて、自分たちで同性パートナーの法的保障に関するムーブメントを起こすべきではないか」という批判をきっかけとし、土屋さん・谷口洋幸さん・松村比奈子さん・私の4名が呼びかけ人となり「同性パートナーの法的保障を考える有志ネットワーク」を立ち上げました。2003年8月23日には、そのネットワーク主催で当時衆議院議員だった家西悟さん（民主党）を招いてブリーフィングも行ないました。

と、ここまで書いて思い出しましたが、家西さんを招いてのブリーフィング（2003年8月23日）から『同性パートナーー同性婚・DP法を知るためにー』（赤杉康伸・土屋ゆき・筒井真樹子編・著、社会批評社、2004年7月4日発売）の出版まで、実は一年かかっていないんですね。まさにマッハで走っていた我々。

『同性パートナーー同性婚・DP法を知るためにー』（以下『同性パートナー』）は土屋さん・筒井さん・私の3名が共同編集という形になっていますが、実質的には土屋さんと筒井さんが執筆者との交渉や編集作業を担当してくださっていました。そんな中、土屋さんと二人で名古屋のゲイカップルヘインタビューを行ったり、大阪や名古屋（土屋さんの当時のご自宅）に集まって編集会議をしたのは良い思い出です。

同性婚やパートナーシップ法を真正面から本格的に取り上げた日本初の本、という触れ込みだった『同性パートナー』。しかし、その後出版された同性婚・DP法関連の各種書籍が「法的保障の具体策」や「現状使える制度」などをメインテーマとするのとは対照的に、『同性パートナー』は理論書・思想書的な佇まいでした。編者3名の意図ではあるのですが、サブタイトルからして「同性婚・DP法を『知るために』」ということで、実はかなり異色だったと今振り返っても思います。そこが評価されたのか、『同性パートナー』は大学の図書館に入れられたり、講義やゼミなどでテキストとして採用されていたようです。他方、いわゆるLGBTのうち、特にLGB当事者からは「踏み込みが足りない」「なぜ同性婚を推進しないのか」と批判を受けたのも確かです。

某密林サイトのレビューを見ると、そこら辺はよく分かるかと（笑）。

『同性パートナー』出版後は、パートナーシップ法関連のイベントで土屋さんと一緒に講師・パネリストを色々と務めました。主だったところを挙げると、

- ・筒井さんがオーガナイズをし、大阪で開催された『同性パートナー』出版記念シンポジウム（2004年8月）
- ・gid.jpフォーラム「パートナーシップ法を考える」（2004年12月）
- ・憲法改正問題に絡んだセミナー「『同性パートナーシップ』から婚姻制度と家族をかんがえる」（2005年6月）
- ・東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 シンポジウム「何故、今、同性婚/DP法？～同性パートナーと生きるこれからのために～」（2005年7月）

で、講師やパネリスト役として土屋さんとご一緒しました。先ほどの『同性パートナー』への評価ともリンクしますが、同性婚・パートナーシップ法のメリット/デメリットをお話すると、特にLGB当事者は同性婚のデメリットを聞いたがらない傾向があったように思います。土屋さんと二人っきりになると、「だからLGBはダメよね」とよくボソッと話していた記憶があります。

2003年からの3年間、土屋さんとは以上のようにパートナーシップ法の活動を共にしてきました。プライベートでも一緒に飲みましたし、セクシュアリティやジェンダーを問わず共通の友人・知人もできました。ある時は、上京中の土屋さんを私の家に泊めたこともありました。何の気なしに作った料理（煮物など総じて和食系）を、「レズビアンの子供の家で、こんな料理を作ってもらったことがない」と褒めて(?)いただいたのは嬉しかったです。また、ドラマ『大奥』での菅野美穂と池脇千鶴の別離シーンを見ながらひっそり涙する土屋さんを、私はキッチンから影で見守っていたものでした。

しかし2006年に入ると、土屋さんの就農とそれに伴う転居、そして私も2006・2007年と「東京レズビアン&ゲイパレード（2007年からは「東京プライドパレード）」」の運営業務に携わるようになり、パートナーシップ法の活動を一緒に行なうことはなくなってしまいました。

土屋さんは転居なさってから、地域柄、家族制度の意義についてさらに考察を深めていると思います。また、私もここ数年で、現実を一步でも変えるための動き方/動かし方について考えることが多くなりました。昔のような形やペースでなくても、お互いに今ならではのスタンスで、土屋さんとパートナーシップ法のお話をしたらきっと面白いだろうなあと、この原稿を書きながら思った次第です。

DP法/同性婚を考えたワタシの経緯（後）

ワタシは考えた。もう、質問状に名前を連ねてくれた人たちを中心にネットワーク作ったらいいんじゃない？んで、作りました。名古屋から何回かミーティングにも訪れました。そうこうしているうちに、共編著者になる筒井さんから「本を出してみない？」と誘われた。イチもニもなく賛成して、赤杉君もまきこんで鬱の療養中だというのに布団の上でラッコのようにお腹の上でノートPC開いてパチパチやりました。この時に文章つづるのに「彫心鏤骨」という言葉があるのは大げさではないと初めて知りました。そして、この本の出版をきっかけに戸籍名での活動を始めました。やっと、腹が据わったというか。「文句言われても、正面からドーンと受けますよ！」という意思表示。ドーン！

寄稿者も佐藤文明さんや二宮周平先生に書いていただけだったので大満足です。たたき台としての役割は今でも充分担えるものだと自負しております。

まだ販売しているので、アマゾンや大型書店でご購入ください。つか、いい本だと思うので、同性婚やパートナー法を語る上ではマスト書籍です！！（マジで）で、肝心の評判ですが、当事者の評判はよろしくなかったです！「同性婚推進！」で盛り上げられる本か、今の不都合を何とかするライフハック的なものが求められていたようでして。

ただ、本を出したことで「文化人」的な役割を背負わされることが多くなり、この辺の活動は赤杉君と良く行動を共にしました。プライベートで一緒に二丁目に飲みに出たりもしました。ついでに酒癖悪いワタシがトンデモナイ迷惑をかけたたりもしました。（死ね）

ただ、根が酒と女にだらしないワタシには「フロントに立つ」ことが重荷に感じたり、コミュニティの中の政治的な部分にいやおうなしに巻き込まれてしまうコトに嫌気がさしてきました。活動を非難するためにパートナーがいないこと根拠にして悪しざまに非難されたりもしました。（あと、下品だとか何だとか）

ここらへんの愚痴などは赤杉君とそのパートナーのわたる君によく聞いてもらいました。わたる君はパソコン通信のUC-GALOP時代からの友人で赤杉君ともどもワタシのリブ的な部分とバカでエロい部分も両方良く分かってくれていました。つか、このころ、理解者が少なかったよね！ホント！！

この中でワタシのウツは慢性化し、名古屋から東京に戻って働くのを再開し始めても体調は芳しくなく、再燃を繰り返していたので、活動から身を引くことを決意します。05年の秋。

ワタシは静かに限界を迎えていました。

鬼レス無双～00年代

<http://p.booklog.jp/book/52935>

著者 : onilez

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onilez/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52935>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52935>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ